

湖国から計量生物学の未来へ思うこと

田中 佐智子 (滋賀医科大学)

私は、学位を取得してから、複数の研究機関を経て、現在滋賀医科大学にて、循環器分野の疫学研究の計画と実施に関わっております。滋賀医科大学では、20 年以上前から、循環器疾患の予防を目指し、疫学研究を実施して数々のエビデンスを創出してきました。また、個人情報や生体試料管理のための専門施設の設置、研究調査に用いるリサーチクリニックの整備、および専門スタッフの育成などの課題に対応すべく、アジア疫学研究センターが疫学研究拠点として整備されました。ここでは、アジアを中心とする国際共同疫学研究の実施や疫学研究者の育成を目指しております。諸外国からの留学生も多く、学生さんから自国の医療・臨床研究の特徴や問題などを聞き、日本の公衆衛生だけでなく、アジア・世界の公衆衛生の動向などをより勉強しなくてはならないと日々痛感しております。医療統計分野では、前任の村上義孝先生が活躍されてきました。私も、医学系の学生への医療統計学の教育、循環器疫学研究に貢献できるよう努力していきたいと思っております。

また私は、数年前から薬剤疫学研究に関わっています。10 年前は記述疫学というと人口動態統計に基づくものがほとんどだったように思いますが、最近では、診療情報・調剤レセプトデータ、安全性データ、電子カルテデータ、様々な疾患レジストリデータなど、治療・薬剤の分野のデータの基盤整備が進められ、薬剤疫学研究が急速に発展しています。私は、いくつかの研究に関わった際に、薬剤疫学研究には、適切な研究デザインを構築する能力、巨大なデータをハンドリングする能力、仮説にあった統計解析手法を実施する能力など、これまでも疫学研究で求められていた能力に加え、更なる応用の能力も求められると感じました。また、この分野では、統計家だけでなく、疫学専門家や経済専門家も求められているものの、そのような人材は不足しているのが現状です。私は、これからの発展が期待される薬剤疫学分野において、将来的にはより多くの統計専門家が研究に参画し、よりよい研究デザイン・統計手法を積極的に提案していくべきだと思っています。この理想のために私ができることは、現在参加している研究で着実に成果をあげて統計学分野の信頼を得ること、既にこれらの分野で活躍されている先輩・後輩の先生方と意見交換をさせて頂き、その情報を活かすことではないかと思っています。

先日、滋賀大学の学長をされている佐和隆光先生から連絡を頂き、滋賀大学に設置されるデータサイエンス学部のお手伝いをしないかと声をかけて頂きました。佐和先生の著書「回帰分析」は、私が修士の学生のころ、当時博士課程にいらした現北海道大学の伊藤陽一先生に薦められて購入しました。「回帰分析」は、厚い本ではなく、文章にも無駄が無く、先輩の伊藤先生も熱く説明くださるのですが、まだ生物統計学を勉強して1年目の私には難解でかなり長い時間をかけて読み進めた記憶があります。また、滋賀大学において、東京大学の竹村彰道先生にもお会いできました。私は学生時代に、竹村先生の著書「現代数理統計学」も拝読していて、竹村先生が当時所属されていた経済学部で講義されるのを毎週聴講したということもあり、私はお二人の前で恐縮のし通しでした。滋賀大学では、私はあくまで専任の先生方のお手伝いですが、統計学を専門とした学部での教育は、未来の計量生物学会員を育てることにつながる可能性が高く、このような機会に参加できることをとても嬉しく思っております。

琵琶湖に臨んだ湖国・滋賀県は、古来より水陸交通の要衝の地として開け、農産物も豊かで商業が盛んでした。近江の商人達は、行商で富を蓄え、各地に出店を構えて財をなし、「琵琶湖の鮎と近江商人は他所へ行って出

世する」といわれていました。私は将来、「滋賀の学生は他所でも滋賀でも活躍する」といわれるように、医歯薬学・統計学の学生の教育に尽力して参りたいと思っております。

私は、今年で社会にでてから 10 年目になります。10 年間の後半は、周産期に関連する体調不良で仕事や学会参加が難しい時期もありました。そのような状況でも何とか続けられたのは、職場・共同研究の先生方のご助力と家族の協力のおかげだと思っています。最近になり、周辺の状況を良い方向に向けることができるようになりました。これからは、今まで育てて頂いた計量生物学会の発展に貢献できるよう、教育と研究の面において、より一層の精進をしたいと思っております。